

次の文章を朗読しなさい。

「あのっ」

思わずころろは、哲平の背中に声をかけていた。

(えっ、何?)

と、自分で驚く。

「ん？」

哲平は足を止めて振り返った。

「もういつぺん、打たせてもらっていい……?」

(な、何、言ってるの!)

勝手に口から飛び出してしまった言葉に、ころろは自分で驚いた。

「えっ?」

哲平も驚いた顔で、ころろを見た。

しばらくぼかんとして、ころろを見つめていたが、

「やめとこ。おまえには、無理」

と、哲平は背を向けた。

「やってみなきゃ、わかんない」

哲平の背中に、ころろは言った。心臓をどきどきさせながら、今度ははっきりと自分の意思で

そう言った。

「悪いけど、この前の振り見て、無理だと思った」

背を向けたまま、哲平が言った。

「あ、あれから、練習したんだ……」

ころろは、顔を赤らめて、小さな声で言った。

哲平は、ゆっくりころろに向き直った。

「へえ、おまえって、そういうやつだったの」

意外だという表情をして、ころろをまっすぐに見つめた。

「じゃ、やってみるか。練習終わってからな」

哲平はそう言い残すと、野球部の仲間の方へ走っていった。

ころろは、ベンチにへなへなと座りこんだ。緊張感からか、ぐったりと疲れが出たような気がした。心臓が破裂するほど高鳴っている。

自分からもう一度哲平に勝負を挑むなんて、考えられなかった。でも、手も足も出なかった哲平の球に、もう一度だけ、挑戦したいという気持ちがずっとあったのだと、いまはつきり意識していた。怖かったけれど、真剣勝負を挑んできた哲平のあの眼と、そして、容赦なく投げ込んでくる白球に、自分も全力で勝負してみたいと思った。こんな気持ちになったのは、初めてだった。自分の中にも、こんな挑戦的な気持ちがあったのかと、驚きと共にちよっぴりうれしくもあった。